

VIII 調査の成果と課題 I

1. 先土器時代のまとめと成果

新屋敷遺跡は大宮台地の北東部に位置し、現状で三角形状に台地部が確認されている地域である。本地域の先土器時代の資料は、新屋敷遺跡に隣接する生出塚遺跡の1976年調査でナイフ形石器1点が検出されたのをはじめに、1985・86年に中三谷遺跡から石器集中2箇所が検出されている。中三谷遺跡と新屋敷遺跡の距離は約0.7kmの位置にあり、石器群の編年的主体は共に岩宿II期であるが、ナイフ形石器等の形態や組成内容に大きな違いがみられ、同時期内における段階差を示しているものと思われる。

(1) 概要と地形

新屋敷遺跡の調査で、先土器時代の遺構及び遺物が検出されたのは、1986年に鴻巣市教育委員会が実施した第1次調査と、当埋文事業団が1993～1995年に実施したC・D区の調査範囲からである。

複数回の調査によって確認された石器集中と礫群の位置関係及び、単独石器の出土地点を、第183・185図の概念図に示した。それを見ると、現状の地形では平坦にみえる当該地域であるが、黒色土を埋土とする大形の窪みが2箇所検出され、埋没谷があったと考えられる。埋没谷の開口方向は北方向と東方向に向かっており、調査区は2つの谷が近接する分水嶺のような状況であったと考えられ、先土器時代の景観は現在と大きく異なっていたことが想定できる。

確認された埋没谷と石器集中、礫群及び単独石器の地点の関係をみると、北方向を向く谷頭を囲む様に岩宿II期の石器集中9箇所と礫群17基が幾つかのグループを形成している。尖頭器及び他時期のナイフ形石器は東方向の谷頭の南側に石器集中1箇所が検出されている以外は、岩宿II期の分布と一部重複しながら、広範囲に散漫に出土している。

(2) 岩宿II期の石器群について

C区とD区は調査年度によって便宜的に区分されているが、実際は調査区が隣接しており、同じ埋没谷を囲む石器集中と礫群である。石器集中の数は9箇所、礫群は17基が検出されている。石器集中と礫群は分布的に密接な関係がみられ、幾つかのまとまりがみられる。グルーピングに関しては、C区報告、D区報告でそれぞれ便宜的に行っているため、名称等の整合性がとれていない。そこで、再度C・D区を併せた形でグルーピングすると下記のようになる。

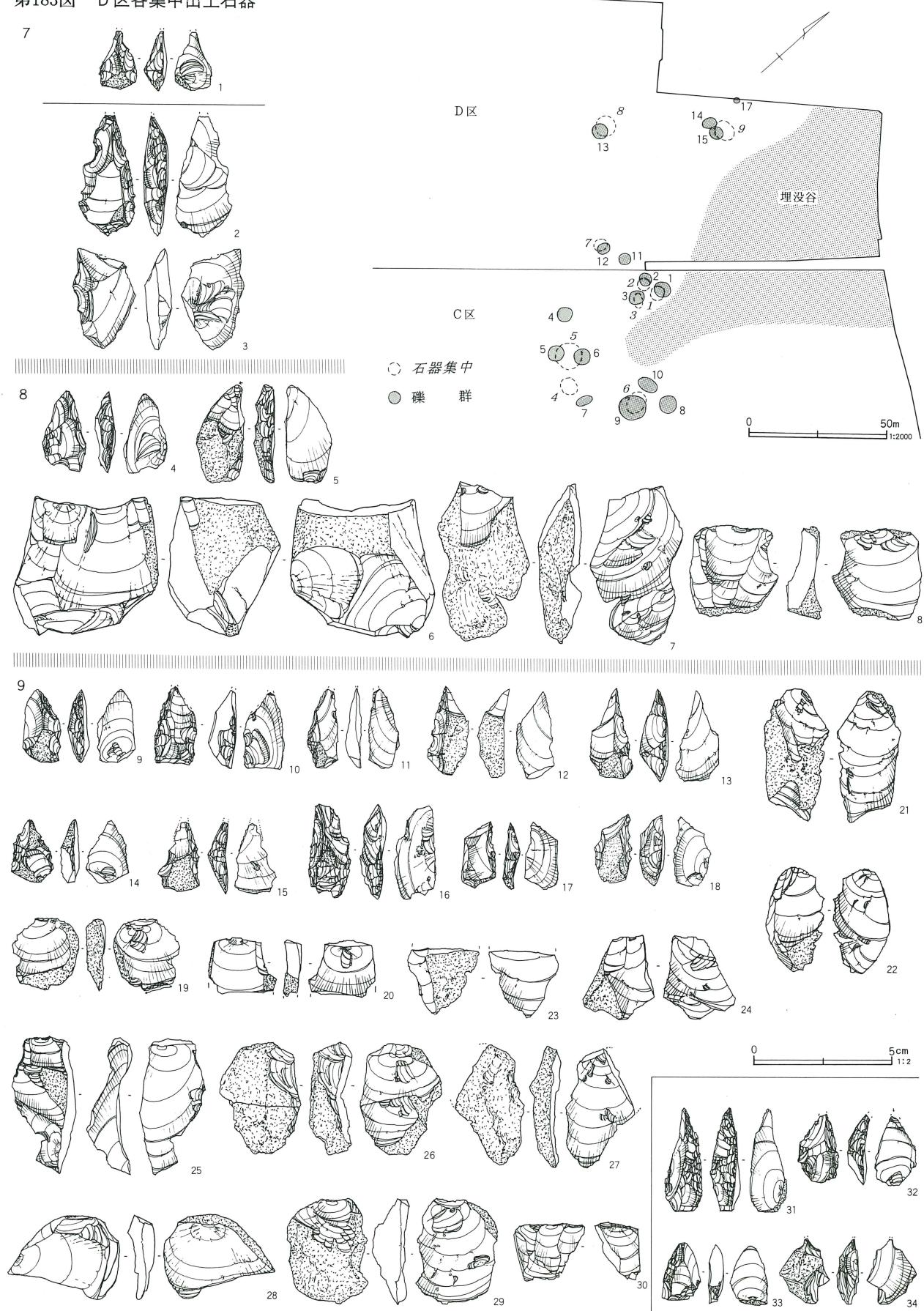
- ・グループa：埋没谷の西側に位置し、石器集中9を中心とする礫群14～17の石器集中1箇所と礫群4基で構成される。石器点数は集中内から90点で、周辺の礫群及び単独を合わせると100点前後になる。D区では中心的な石器集中で、ナイフ形石器13点以上、搔・削器2点、ドリル2点と磨石がまとまっている。

- ・グループb：埋没谷のラインから西側に約50m離れたところに位置する。グループの内容は、石器集中8と礫群13で石器集中1箇所、礫群1基の小規模な構成である。石器の数は76点出土しているが、器種はナイフ形石器2点と、新屋敷遺跡では少ない敲石が1点出土している。

- ・グループc：埋没谷の谷頭の西側に位置し、C区とD区の調査区をまたがるように分布している。石器集中は1～3・7の4箇所、礫群は1～3・11・12の5基で構成されている。石器の総数は300点近く、最大規模のグループであるが、碎片の占める割合が高く、製品はナイフ形石器と搔・削器が数点、角錐状石器と磨石、敲石等が検出されている。また、42はC区報告で突起部に言及したが搔・削器に分類した。D区第14図25・26の資料を検討する限り同じ器種とした方が妥当であると考え、以下ドリルとして検討する。

- ・グループd：谷頭の最も奥まった位置から検出され

第183図 D区各集中出土石器



第184図 C区各集中出土石器



ている。石器集中4・5の2箇所と礫群4～7の4基で構成されている。石器の総数は約200点を数え、ナイフ形石器が10点とまとまっており、他に角錐状石器が2点、敲石等が検出されている。

・グループe：谷頭の東側に位置する礫群のまとまりに、石器集中が含まれるように検出された。石器の点数は約50点と少なく、器種はナイフ形石器4点と搔・削器が検出されている。

以上、各グループの概要を整理した。次にグループの分布状況をみると、谷頭を囲むようにグループc～eは近接し、礫群は連続しているように見える。一方、谷の東側には石器集中及び礫群の分布が広がらず、西側は谷のラインに沿って、約40mの間隔でグループa～cが並んでいる。それを、石器集中の規模と合わせると、最北東部のグループaと谷頭の最も奥まった位置にあるグループcから、ナイフ形石器を中心とした充実した資料が検出されている。礫群は谷頭を囲む様に密集しており、離れたグループa・bは小礫を中心としたものである。

・各器種の分布状況：次に各グループと石器の分布の状況を整理する。ナイフ形石器は石器の事実記載の部分で、先端が尖り基部が比較的丸くなるものをa類、台形状になり刃部が幅狭で器軸に直交するものをb類の2つに大別した。これは、C区報告書の結語でナイフ形石器と切出形石器の検討を行ったが、ナイフ形石器がa類、切出形石器がb類にほぼ対比される。この分類にそって、各グループのナイフ形石器をみると、a類はグループaとグループdに集中する傾向がみられ、b類は点数は少ないが一定の石器集中に偏在しないで、各グループから検出されている。

角錐状石器は4点と少なく、グループcとグループdから検出されている。

磨石はグループa・c・eにまとまる傾向がみられる。

ドリルはグループa・cから検出されている。

(3) 岩宿II期石器群の編年的位置づけ

C区の報告書の結語で、新屋敷遺跡と明花向遺跡C区IV層、大和田高明遺跡の石器群を比較して検討した。明花向遺跡の編年的位置づけは、砂川期の前後で各研究者の間で意見の分かれることもあるが、新屋敷遺跡との比較検討から、砂川期以前に位置づける方が妥当であると考える。また、1997年に報告した滝の宮坂遺跡の資料を追加することで、大宮台地に特徴的にみられる石器群と考えられ、今後一層の検討が必要であると痛感する。

次に、岩宿II期の中での編年位置づけであるが、該期は多様な形態のナイフ形石器・切出形石器がみられる（組成する）時期と認識されているが、この多様な石器群を、段階細分として捉えられるのか、時期差とすべきではなく、遺跡差として捉えるべきかで、考え方の相違がある。筆者は段階差として整理する方向で考えている。その立場で、C区報告書の結語とシンポジウム『AT降灰以降のナイフ形石器文化』の発表要旨である『石器文化研究』5号の「V～IV下層段階の細分」で編年試案を呈示したが、この時点では、基部加工のナイフ形石器の一群との関係で、考えがまとまらない状態であったため、第III段階を雑多とし、第IV段階を基部加工のナイフ形石器の段階として一応位置づけた。その為、新屋敷遺跡の石器群を第III段階（V～IV下層段階を4段階に区分し、第I期をV層：殿山期とし、第II～IV期を岩宿II期の細分段階とした。よって第III段階は岩宿II期の中段階になる）に位置づけた。しかし、大宮台地・下総台地が編年表が空白になってしまい、問題があると意識していた。シンポジウムで須藤氏が明花向遺跡を男女倉遺跡との関係から岩宿II期最終段階、砂川期直前に位置づける考えを展開しており、筆者も基本的にその考え方を納得できることから、現在は新屋敷遺跡のナイフ形石器と、基部加工のナイフ形石器を段階差ではなく、それ以外（系統差等）として捉えた方が、より岩宿II期から砂川期への変遷を説明できると考えている。